

# 私とシルクロード

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

私にとってシルクロードは、ロマンの塊でした。1980年に始まったNHKのテレビ番組の「シルクロード」は、石坂浩二のナレーションと喜多郎のテーマ曲が今でも脳裏に残っています。また、久保田早紀の「異邦人」と谷村新司の「昴」も、私にとってはシルクロードにつながっています。歌のうまい仲間を誘ってカラオケバーで歌ってもらった思い出もあります。

古い話で恐縮ですが、今からちょうど8年前、西安交通大学創立100年祭に招かれました。有名な上海交通大学の兄弟校です。毛沢東が建国した際、上海は海岸に近く、敵に占領される危険があるということで

内陸部に創設したのが西安交通大学です。中国の宇宙工学が集約されているそうです。そのせいか、ひな壇には軍服を着た人ばかりでした。

西安では秦の始皇帝陵の兵馬俑を見学しました。入り口を入ると1000体を越える古代人が私を迎えてくれたような“感激”を味わったものでした。圧倒された記憶があります。ほぼ等身大の像はひとりとして同じものがなく、色々な民族から兵士を集めていた当時の様子が分ります。発掘・修復は今でも続いているようですが、とにかくすごい。日本へ仏教が伝わる(538年ごろ)より750年も前にこんなにすごい施設ができていたのです。また、その途中で楊貴妃が使ったという温泉にも立ち寄りました。国共合作時に蒋介石の隠れ家も見ましたが、兵馬俑の迫力の前では関心の枠外でした。

この旅は西安→新疆ウイグルのウルムチへ続き、敦煌へ戻り、北京へ帰る約1週間でした。西安からウルムチの眼下には広漠とした台地が続きました。ゴビ砂漠です。

普通の砂漠とはまったく違う表情、太古は海底ではなかったかと思われる地表が延々と続いていました。目線を水平にすると雪を頂いたアルタイ山脈と天山山



秦の始皇帝陵・1000体を越える古代人を背にした筆者



ゴビ砂漠にぽつんと残る万里の長城の西の果ての痕跡・烽火台

脈がくっきり見えました。ウルムチに着いたのは夜でした。次の日はバスで市内観光。といっても市内のいたるところに大砲を積んだ車両基地があり、一般道路に面しているのにはビックリ。さすが国境の町、という臨場感があり、優雅な観光とはなりません。後で聞くとウルムチ周辺は石油基地でもあるので警戒は厳しいとのこと。

翌日は敦煌へ戻りました。機上から見る敦煌は砂漠の中にぽつんと置かれた緑のオアシス。時は4月、“黄砂”の真っ只中でした。中国の友人たちはみんな一緒に“なんでこんな時期に敦煌へ行くのか”といぶかった理由が分りました。

太陽がどこにあるか分からない日とキラキラした陽光で肌がピリピリする日が混在します。有名な莫高窟に行きました。ヨットパーカーを着ていましたが、バラバラ音がするのでよ〜く見ると大粒の砂でした。その日ホテルに帰って机の上に置いてあった黒皮の名刺入れを見ると「灰色」に見えたので、指でそつとなぞってみると、なんと粉のような微粒の砂でした。聞きしに勝る自然環境にタダタダびっくり。翌日市内を見渡すと皆マスクを付けていました。

駱駝に乗って砂漠見物。万里の長城の最西端の遺跡

も見ました。玉門関にも行きました。井上靖作の「敦煌」を映画化したときのロケ地とお城のセットも見学しました。この映画については現役時代に協力させられて、苦労したので映画セットの現場に立ち、感慨にふけりました。お城のセットはその後も活用され映画・テレビ番組を300本ぐらい撮影に利用されているそうです。この話を聞き、少しは役に立ったのかと安堵しましたが……

この旅行の目的は中国政府の長年の計画である「西部大開発プロジェクト」を推進するためのアドバイスでした。西安や敦煌の役人と意見交換会に参加しました。地元テレビ局のインタビューもありました。そうした会合での私の意見を記してみます。

「アメリカの西部大開発はなぜ成功したか。それは金が発見されたからです」「では中国で金に変わるものは何か。それはワインではないか」

敦煌周辺のオアシスは葡萄の産地として有名です。というより葡萄しか作れないといったほうがいいと思いますが。葡萄の枝を砂地に埋めて厳冬を過すのですが、私が訪問した時期は、ちょうどその枝を棚に這わせる作業をしていました。物産店には干し葡萄などの乾燥果物しか売っていません。一袋10元です。干し葡萄よりワインの方が「付加価値は高い」という、イロハの「イ」ですが、これが地元では評判になりました。敦煌ブランドのワインがたくさん出荷されるようになったと聞いています。

というようなわけで、私の憧れの地であるシルクロードの「ほんの一片」を体験したわけです。その印象をひと言でいえば「あんな広漠とした大自然の中で、よくぞ文化が栄えたな〜」です。しかし最近、そこにはソグド人という、すごい民族の活躍があったということを知りました。シルクロードと唐帝国：森安孝夫著より抜粋して、以下にそのソグド人の歴史を紹介します。



シルクロードの商業で活躍した集団はソグド人である。最初は商人として中国やユーラシア東部の遊牧国家において活躍したが、やがて政治・外交・軍事・文化・宗教にまで重要な地位を占めることになる。

ソグド人の故郷はソグディアナ(ソグド人の土地)である。ユーラシア大陸のほぼ真ん中、パミール高原から西北に流れ、アラル海に注ぐアム河とシル河に囲ま

れた地域・農牧接壌地帯(農業と牧畜を兼業)である。

中心に大都市サマルカンドがある。現在のウズベキスタンに当る。ペルシャに向かうことも、東方へ向かえば天山山脈北嶺からアルタイ山脈を越えてモンゴルへ。西方へはウラル山脈南部から南ロシア。中国へはフェルガーナを通り、パミールを越えて東トルキスタンに入る要害地である。

ソグドの最初の発展は、紀元前6～5世紀。次の発展は5～6世紀で、灌漑路や遊牧民・砂を防ぐ長城が整備されていた。乾燥地のオアシスの農耕地や都市が増大し、人口も増加すると限界が来る。人口過剰になると、他の都市や他地域との交流する商業に活路を見出す人口が増える。他地域で仲間が定着するとそこにソグド人コロニー(植民地・居留地)が出現する。

ソグディアナはユーラシアのど真ん中に位置し、東の中国、東南のインド、西南のペルシャ～地中海東部、西北のロシア～東ヨーロッパ、東北のセミレチエ～ジュンガル～モンゴルと世界に通じる天然の交通路のシルクロード網の心臓部だ。ソグド商人が、国際的な「シルクロード商人」へと発展したのは自然のことといえる。

ソグド人コロニーは西の黒海周辺に達し、東はジュンガルからモンゴル・満州へ。東トルキスタンのクチャ・ホータン・トルファン・ロプノール地方から河西回廊の沙州(敦煌)・涼州(武威・姑蔵)、更に北中国のほとんどの大都市にまで広がった。

やがて8世紀中ごろのイスラム朝のもとでソグド文化の独自性は失われ、ペルシャ文化に吸収されてしまう。ソグド社会では自由人と非自由人が峻別されていた。身分は自由人・商人・職人・農民・奴隷・捕虜・人質などである。自由人は土地所有者で武装していた。大邸宅には工房が付属し、職人がいた。



国境を越え、国籍を越えて「利を求める」集団を華僑・印僑・ユダヤというようです。私の姉の主人は香港生まれでした。その義理の兄の教えです。しかし、シルクロードで活躍したソグド人こそ華僑や印僑の源流ではないかと考えるようになりました。狭い島国で縄文時代から延々と生き延びてきた私たち日本人とは全く異なった世界を築き、生きたソグド人から学ぶことは多いと思いますが如何でしょうか。